

第6節 成果の発信・普及

(1) UTO Well-Being 探究 Award⁽²⁰⁾ 2024, ロジック・スーパープレゼンテーション⁽²¹⁾

研究開発成果の普及の場として、7月にUTO Well-Being 探究 Award⁽²⁰⁾、3月にロジック・スーパープレゼンテーション⁽²¹⁾を年2回開催し、県内高校、SSH指定校、SSH関係者、教育関係者等、多くの訪問があった。(②実施報告書本文49ページおよび50ページ参照)

7月のUTO Well-Being 探究 Award⁽²⁰⁾ 2024は高校3年課題研究の成果発表がメインの会であるが、それだけではなく、本校の探究的な学び、探究活動の様子を多くの人に広く見てもらうよう熊本県でも有数の施設である熊本城ホールを丸一日貸し切り、全国のSSH指定校、県内の公立私立高校、地元の小中学校、教育関係機関に広く宣伝した。

(図.1)当日は全国から教育関係者、OBOG、保護者、地域の方、宣伝を見てきたくださった方など延べ225人の来場者があり、大変盛況であった。(図.2)

3月のロジック・スーパープレゼンテーション⁽²¹⁾は地元の宇土市民会館で実施したが、年度末であり、1年間の成果発表の集大成ということで中学3年生、高校1,2年生の課題研究の成果発表を中心に行った。昼休みにはポスターセッションや分野別発表会も実施し、特に高校1年、2年生はすべての生徒が何らかの形で当日は発表を行うことができた。

7月、2月ともに成果発表会前日を本校で探究の「問い」を創る公開授業および授業研究会を行った。教員間の相互授業参観に加え、実施したすべての授業で指導案や使用したプリント、シラバスなどをA1用紙1枚にまとめ、広い部屋においてポスターセッション形式で来場者に説明を行った。(②実施報告書本文15ページ、16ページ参照)



【図.1 探究 Award チラシ】



【図.2 宇土中・高来校者数】

(2) 学校訪問・視察対応

SSH研究開発における探究活動や探究の「問い」を創る授業⁽⁶⁾に関する学校訪問・学校視察についてもオンライン、実際の来校など多くの学校が本校を訪れ、対応した(表.1)。SSH事業を通して開発した探究活動及び探究型授業における指導と評価の取組の発信や探究の研究開発の成果をSSH指定校のみならず、一般校への波及ができた。

【表.1 令和6年度学校訪問・視察対応一覧】

月日	訪問校および対応内容	人数
4.9	愛媛県立宇和島高等学校「授業デザイン」に関するオンライン相談	2名
6.25	兵庫県立豊岡高等学校「探究の指導体制」に関するオンライン相談	1名
6.27	熊本県立人吉高等学校「探究活動の取組」に関する助言	1名
7.5	熊本大学教育学部附属中学校訪問「探究活動の指導支援」	4名
7.19	宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校「探究型授業」オンライン相談	1名
9.3	札幌市立高等学校改革「市立札幌啓北商業高等学校・市立札幌藻岩高等学校・市立札幌開成中等教育学校」訪問「探究活動の指導体制」に関する指導助言	4名
10.2	長崎県立佐世保北中学校・高等学校訪問「探究活動・探究型授業」に関する指導助言	2名
11.22	徳島県立川島高等学校訪問「探究型授業・観点別評価」に関する指導助言	3名
12.4	富山県立富山中部高等学校「探究活動の指導体制・探究型授業・観点別評価」に関する指導助言	2名
12.16	鹿児島県大川口高等学校訪問「探究活動・探究型授業・キャリア教育」に関する指導助言	2名
1.14	岡山県立玉島高等学校訪問「探究型授業・探究活動の取り組み」に関する指導助言	1名
1.16	福井県教育委員会嶺南教育事務所訪問「探究活動・ガイドブック・評価」に関する指導助言	4名
1.17	宮城県宮城野高等学校訪問「探究活動・キャリア教育」に関する指導助言	2名
1.29	鹿児島県立福山高等学校訪問「探究活動・外部連携」に関する指導助言	2名
2.6	長崎県立長崎南高等学校「探究活動・探究型授業・観点別評価」に関する指導助言	2名
2.26	福井大学教職大学院・福井県立美方高等学校「探究活動」に関する指導助言	2名
3.12	宮崎県立日南高等学校「キャリア教育・探究活動」に関する指導助言	3名

(3) 研究成果要旨集⁽¹⁹⁾・課題研究論文集⁽¹⁹⁾・独自開発教材

5月に高校2年、3年のGS課題研究⁽¹⁷⁾対象者向けにGS課題研究⁽¹⁶⁾を展開するにあたって、指導教員及び生徒が見通しをもてるように開発した「GS本⁽¹⁹⁾」を製本し、配布した。研究テーマごとに必要となるコンテンツや進捗状況が異なるSS課題研究⁽¹⁵⁾と違い、学年所属教員が学年会で進捗状況や目線合わせをするGS課題研究⁽¹⁶⁾で活用できるよ

う探究の過程に沿ったコンテンツの配列にした。7月には高校3年生のSS⁽¹⁵⁾、学際⁽¹⁷⁾、GS課題研究⁽¹⁶⁾の1年半の研究
研究成果をまとめた「課題研究論文集⁽¹⁹⁾」を製本し、高校3年生に配布した。3月には高校1年SS、GSプレ課題研究
(13)、高校2年SS⁽¹⁵⁾、GS⁽¹⁶⁾、学際課題研究⁽¹⁷⁾、中学3年研究論文代表の探究の成果をまとめた「研究成果要旨集⁽¹⁹⁾」
を製本し、高校1年、2年及び各種関係機関に配付した。ホームページにも一部公開をした。(図.3)



【図.3 令和6年度発刊物（左からGS本、課題研究論文集、課題研究要旨集）】

(4) ホームページ

ホームページを令和4年1月リニューアルし、SSH専用ページでは、①SSH概要②歴史③成果④コース・組織体制⑤
報告書⑥探究の「問い」を創る授業⑦探究活動ロジック⑧開発教材⑨連携・社会と共創⑩評価開発⑪先輩の研究⑫
実験室の12サイトからSSH事業の成果を発信した。SSHをはじめとする日々の活動報告は、ホームページのブログに
掲載した。(図.4)



【図.4 ホームページ】

(5) 教育ビデオライブラリー取材・撮影

一般財団法人日本児童教育振興財団が学校教育振興事業の一環として制作している「教育ビデオライブラリーシー
ーズ」について、本校のSSH活動の取材が令和6年7月～令和7年かけて行われた。(表.2)

【表.2 教育ビデオライブラリー概要】

作品名	「未知なるものに挑むUTO-LOGIC ⁽¹⁾ !! ～熊本県立宇土中高一貫校が切り開く学びの可能性～」
作品概要	従来通りの授業を聞いてノートを取る、いわゆる「受け身」の授業スタイルからの脱却が学校教育の大きなテーマになっている現在、生徒が自ら能動的な学び手になる探究型授業の先駆的な取り組みとして、全国から注目を集めている学校がある。熊本県立宇土中学校・宇土高等学校（中高一貫校）だ。「UTO-LOGIC ⁽¹⁾ 」を備えた人材を育てるべく、全職員で行う探究教科「ロジック」を設定し、教師も、生徒も、学びにおいては「答え」ではなく「問い」こそが大切だと考え、全教科で「探究の『問い』を創る授業 ⁽⁶⁾ 」を実践している。この実践を始めてから約10年、学びに向かう生徒たちの姿が、確実に変わってきたことに教師も確かな手応えを感じているという。これからの学びにとって必要な「問い」とはなにか、新しい授業のカタチを模索する宇土中高一貫校の実践を長期にわたって取材、撮影、編集してビデオ作品にまとめ、次の時代に求められる学校教育の可能性を伝えたい。
取材内容	・全教科で実施する「探究の『問い』を創る授業 ⁽⁶⁾ 」 ・全職員で行う学校設定教科「ロジック」 ＝生徒1人1テーマで探究活動「ロジックリサーチ ⁽¹²⁾ 」の過程と生徒の思い ・指導する教員の体制や思い、ロジックガイドブック ⁽¹⁸⁾ の内容など
取材日程	2024年7月～2025年3月
DVD収録	約60分、2025年4月完成予定

(6) 「ウトウトタイム⁽²⁷⁾」睡眠研究の成果の発信と普及

本校が行っている産学官連携の取り組みである昼休み後の午睡「ウトウトタイム⁽²⁷⁾」について、その実施内容や効果、生徒の研究内容など多くの問い合わせがあり、メディアや紙面取材、及び睡眠教育に関する他校指導・探究活動支援を実施することができた。(②実施報告書(本文)66ページ参照)

【メディア紹介及び紙面取材】

- ① 6/3(月)名古屋中京テレビ「睡眠」に関する取材・放送
- ② 6/17(月)熊本日日新聞「睡眠」に関する取材・紙面紹介
- ③ 10/9(水)テレビ朝日「林修の今知りたいでしょ!」探究活動取材・放送
- ④ 10/21(月)TBS「THE TIME」授業取材・探究活動取材・ウトウトタイム⁽²⁷⁾取材・放送
- ⑤ 10/23(水)実況教育出版産経公務員模擬テスト掲載
- ⑥ 12/5(水)テレビ朝日「林修の今知りたいでしょ!」再放送
- ⑦ 2/1(土)テレビ朝日「林修の今知りたいでしょ!」「睡眠・血管SP」
- ⑧ 2/27(木)日本テレビ系列「ZIP」「睡眠に関する取組」
- ⑨ 3/7(金)読売中高生新聞「ウトウトタイム⁽²⁷⁾」に関する取材・紙面紹介
- ⑩ 3/12(水)博報堂教育財団こども研究所「産学官連携睡眠教育」取材・HP掲載
- ⑪ 3月末くまもと病院ガイドブック2025「ウトウトタイム⁽²⁷⁾及び生徒課題研究紹介」

【睡眠教育に関する他校指導・探究活動支援】

- ① 8/26(月)熊本県立小川工業高等学校「探究活動・睡眠」に関する指導助言
- ② 9/4(水)石川県立羽咋高等学校「ウトウトタイム⁽²⁷⁾導入」に関する指導助言
- ③ 11/21(木)立教大学オンライン相談「ウトウトタイム⁽²⁷⁾」に関する指導助言
- ④ 12/23(月)成蹊中学校オンライン相談「睡眠に関する探究活動」に関する指導助言
- ⑤ 12/25(水)石川県立能登高等学校オンライン相談「睡眠に関する探究活動」に関する指導助言
- ⑥ 12/26(木)宮崎県立都城西高等学校オンライン相談「睡眠に関する探究活動」に関する指導助言
- ⑦ 1/31(金)千代田区立九段中等教育学校オンライン相談「睡眠に関する探究活動」に関する指導助言

(7) 中学校説明会

近隣中学校に本校職員が出向き、訪問中学校卒業後、本校に進学した生徒のSSH諸活動に関連した取組や成果を中心に説明することができた。

(8) 職員の実践報告

探究活動や探究型授業の実践について、本校3名の指導教諭を中心に多くの機会での実践発表や民間教育機関主催セミナー講演、講師を受ける機会を通して、研究成果の普及を進めた。県内外から職員研修の講師依頼を受けた。

(表.3)

【表.3 今年度取り組んだ主な実践発表, 研究授業一覧】

月日	内 容	教 員	月日	内 容	教 員
4.13	熊本大学における教育実習事前演習Ⅰ	奥田和秀 後藤裕市	9.24	鹿児島県立屋久島高校から授業見学及び意見交換	奥田和秀
4.15	福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科ニュースレター報告	後藤裕市	9.27	熊本県公立商業関係高校主幹・学科主任研修会	梶尾滝宏
4.20	熊本大学における教育実習事前演習Ⅱ	奥田和秀 後藤裕市	10.10	福井県教育庁 嶺南教育事務所「嶺南ふるさと学習推進プロジェクト」講師	後藤裕市
4.24	学びのイノベーションプラットフォーム(PLIJ)Curator 実践報告	後藤裕市	10.31	熊本県高等学校教育研究会書道部会研究協議	梶尾滝宏
6.12	阿蘇中央高校職員研修会講師	奥田和秀	11.13	鹿本高校での日本史探究授業に参加しての指導・助言	奥田和秀
6.24	富山県教育委員会主催・とやま新時代創造プロジェクト学習推進事業「STEAMの学び研究会」講師	後藤裕市	11.16	国立病院機構熊本南病院セミナー講師	後藤裕市
7.10	河口・海岸・海洋における防災の視点に立ったSTEAM教育の開発・実践公開授業	梶尾滝宏	11.27	公文教育情報講座講師	後藤裕市
7.11	南稜高校職員研修会講師	奥田和秀	11.29	熊本県高等学校教育研究会理化部会協議大会(全体会)講師	梶尾滝宏
7.12	宇土市立宇土東小学校職員研修講師	後藤裕市	12.3	長崎県教育委員会「第1回探究スキル向上ワークショップ」講師	後藤裕市
7.18	熊本大学教育学部附属中学校職員研修講師	後藤裕市	12.11	熊本県立鹿本高等学校職員研修講師	後藤裕市
7.22	探究の「問い」を創る授業の公開授業	全 員	12.19	熊本県立八代東高等学校職員研修講師	後藤裕市
7.25	熊本県商業・農業・工業関係高校副校長・教頭研修会講師	梶尾滝宏	12.11	熊本県立人吉高等学校公開授業指導・助言	梶尾滝宏
8.7	学びのイノベーションプラットフォーム(PLIJ)Curator 会議・実践報告	後藤裕市	12.19	学びのイノベーションプラットフォーム(PLIJ)Curator 会議・実践報告	後藤裕市
8.21	熊本物理サークル「? (ハテナ) の会」講師	梶尾滝宏	2.1	Google 教育者グループ教育研究会GEG熊本サミット講師	梶尾滝宏
	熊本県高等学校教育課程研究協議会地歴公民部会授業実践発表	奥田和秀	3.13	熊本県立上天草高校での日本史探究授業に参加しての指導・助言	奥田和秀
8.24	熊本県高等学校家庭クラブ連盟家庭クラブ指導者養成講座講師	梶尾滝宏	3.18	探究の「問い」を創る授業の公開授業	全 員
8.28	熊本県立北稜高等学校職員研修講師	後藤裕市			

(9) メディア掲載 (掲載許可をいただいた資料は、第3章関係資料報道資料参照)

社会との共創プログラムを通して、産学官及び異世代を含めたネットワークを活用した取組を進め、メディアを通じた成果の発信ができた。特に科学部は地学班の36年ぶりとなる「不知火」の観測には地元の漁師や神社の協力もあり、多くの取材が行われた。AI班のワークスアプリケーションズとの連携も取材・発信をすることができた。(②実施報告書(本文)58,59ページ参照) 科学部以外にもウトウトタイム⁽²⁷⁾ (②実施報告書(本文)66ページ参照)や、オンライン英会話 (②実施報告書(本文)53ページ参照)の様子、地域に密着した課題研究の取り組みなど、新聞社やテレビ報道関係を通して、大いに成果の発信をすることができた。

【テレビ報道】

- ① 6.8(土) NHKBS4K「すごい空見せます！劇的気象ミュージアム（3）」
- ② 7.9(火) KAB くまもと Live touch「県内初 オンライン英会話授業に導入」
- ③ 7.30(火) RKK ニュース「世界の「蚊題」を考える アース製薬との連携」
- ④ 8.1(木) KKT ニュース「蚊をテーマにアース製薬と連携授業」
- ⑤ 8.19(月) TKU ニュース「宇土高校で特別授業 アース製薬と蚊の生態など学ぶ」
- ⑥ 9.3(火) NHK クマロク！「県立宇土高の生徒が「不知火」観測に挑戦 発生条件などを調査」
- ⑦ 9.4(水) KKT news every. 「くまもと高校生が 36 年ぶり撮影成功！八代海の謎多き現象「不知火」とは？」
- ⑧ 9.12(木) KAB くまもと Live touch「36 年ぶり不知火の撮影に成功 宇土高校科学部「粘り強くやってきた」」
- ⑨ 9.17(火) RKK タ方ライブゲッツキン「近年観測されていない蜃気楼の一種『不知火（しらぬい）』宇土高校の科学部が 7 年の研究を経て観測に成功」
- ⑩ 9.26(木) KKT news every 「くまもと【幻の光】八代海の『不知火』を再び！36 年ぶりの撮影に成功した高校生の挑戦に密着」
- ⑪ 10.31(木) NHK クマロク！「幻の“不知火”現象の観測に高校生が挑む！NHK のカメラには貴重な映像が！」
- ⑫ 2.25(火) TKU ニュース「熊本県立宇土高校が『不知火現象』の研究で文部科学大臣賞受賞 7 年間に渡る研究とフィールドワーク評価」

【新聞報道】

- ① 4.26(金) 熊本日日新聞「全国 AI 甲子園 宇土高見事 1 位」（報道資料掲載）
- ② 6.7(金) 人吉新聞「熊本地学会 人吉盆地の成り立ちは？高校生交え 6 年ぶり郡市巡検」
- ③ 6.20(木) 熊本日日新聞「宇土中・高「ウトウトタイム」導入 10 年」（報道資料掲載）
- ④ 7.11(木) 熊本日日新聞「英会話授業 海外講師と一対一」（報道資料掲載）
- ⑤ 7.20(土) 熊本日日新聞「宇土高生 パウンドケーキ開発」（報道資料掲載）
- ⑥ 7.25(木) 熊本日日新聞「JAXA の柳川さん「宇宙を自分事に」宇土中・高生に講演」
- ⑦ 8.17(土) 毎日新聞「八代海・不知火再現なるか 来月地元漁協の協力で漁り火観測」
- ⑧ 8.21(水) 朝日新聞「不知火の再現 7 年目の夏こそ」
- ⑨ 8.25(日) 熊本日日新聞「燃ゆる火はどこへ（上） 不知火の謎解明したい」
- ⑩ 8.27(火) 熊本日日新聞「燃ゆる火はどこへ（下） 今年こそ観測を 高まる期待」
- ⑪ 9.3(火) 朝日新聞「「不知火」撮った 謎増えた」（報道資料掲載）
- ⑫ 9.3(火) 朝日新聞「不知火？高校生が撮影 漁協が協力 望遠レンズで観測」
- ⑬ 9.4(水) 熊本日日新聞「「神秘の火」観測にぎわう 宇城市「不知火・海の火まつり」
- ⑭ 9.4(水) 熊本日日新聞「横方向に二つの光 不知火現象？宇土高生撮影」
- ⑮ 9.5(木) 朝日小学生新聞「ふしぎな光「不知火」を撮影 熊本・八代海で地元高校生たち」
- ⑯ 9.6(金) 熊本日日新聞「新生面にて不知火の研究について掲載」（報道資料掲載）
- ⑰ 10.2(水) 朝日新聞「漁師が支えた不知火撮影 宇土高校科学部地学班 36 年ぶり成功」（報道資料掲載）
- ⑱ 10.12(土) 朝日新聞「「不知火」撮影 漁師の献身 熊本の高校生 36 年ぶり成功」
- ⑲ 11.4(月) 日本教育新聞「江戸時代の自然災害を調査 津波の防災に向けて伝承活動に取り組む」（報道資料掲載）
- ⑳ 12.19(木) 毎日新聞「熊本の海にゆめく 不知火 解明に挑む高校生に届いた先人の資料」
- ㉑ 12.24(火) 毎日新聞「先人つなぐ不知火研究 昭和初期・物理学者の資料届く」

第 8 節 研究開発実施上の課題及び今後の研究開発の方向性

- （１）「未知なるものに挑む U T O－L O G I C ⁽¹⁾ で切り拓く探究活動の実践」を研究開発課題に，中高一貫教育校として 6 年間を通した「Ⅰ 理数教育と探究の「問い」」，「Ⅱ 探究活動」，「Ⅲ Well-Being Ⅰ・Ⅱ ⁽²⁶⁾ の開発」に関する研究開発実施上の課題を上段に，今後の研究開発の方向性を下段に示す。（表. 4）

【表. 4 研究開発実施上の課題「上段」，今後の研究開発の方向性「下段」】

Ⅰ 理数教育と探究の「問い」	Ⅱ 探究活動	Ⅲ Well-Being Ⅰ・Ⅱの開発
「探究活動の時間の確保」「探究活動への興味」の項目の重要度指標が高いものの満足度指標が低く，重点改善要素であり，探究のプロセスを意識した授業の充実が課題である。	高校 1 年次における「研究の客観性」が重点改善項目であり，データ収集，標準化等の流れを正確に行い，客観的に分析させることが課題である。	「Well-Being Ⅰ・Ⅱ ⁽²⁶⁾ 」における取組において，「レポートのまとめ方」「今後の課題研究への活かし方」「統計処理を深く学んでみたい」の 3 項目に関して，1 学年は重要度指標が低く，活用する力が高まっていないことが課題である。
数学・理科や課題研究における探究活動の重要性や満足度はポートフォリオ分析から重要度指標，満足度指標ともに高い数値が見られるが，数学・理科以外の教科における探究活動において，重要度指標は高いものの満足度指標が低く，重点改善項目に挙げられている。数学・理科以外の教科学習においても，普段の授業時間から問題解決の場面を作り出し，探究の「問い」を創る授業を充実させた上で，学力の三	研究の客観性は、信頼性や再現性を確保するために非常に重要な要素であり、科学的な探究が公平で誠実なものであることを保証している。ロジックリサーチ ⁽¹²⁾ ，ブレ課題研究 ⁽¹³⁾ ，2 年次からの課題研究と段階を追ってより深いテーマ設定をしていくことで改善させていきたい。Well-Being Ⅰ ⁽²⁶⁾ でもデータの重要性を学んでいるため，自分の仮説や期待に合わせてデータを無意識に操作したり，偏ったデータを選ん	ウェルビーイングを目指した意思決定のために，データ駆動させる生徒を育成することはできているが，Well-Being Ⅰ ⁽²⁶⁾ を学んだ 1 学年についてはそれを活用する力について，重要度指標が高まっていない。それに対して，2 学年の重要度指標は高まっている。Well-Being Ⅰ・Ⅱ ⁽²⁶⁾ を学ぶことで，統計データをただ理解するだけでなく，上手に活用することで，感覚や直感だけに頼ることなく，データに基づ

要素のバランスを重視した適切な観点別評価を実施させることが必要であると考えられる。	だりしないように注意する必要がある。データはそのままの状態では正確に収集し、客観的に分析されるべきであることも引き続き指導していきたい。	いた根拠のある意思決定が可能になる。これにより、より適切な判断を下すことができ、結果としてリスクを低減し、成功の確率を高めることができることを引き続き指導していきたい。
「理科は探究活動に役立つ」の項目について、満足度指標は高いものの重要度指標が低く、維持項目に挙げられ、他教科の題材を理科的な見方・考え方で学ぶ教材開発が課題である。	高校2年次の「論理性(Logicality)」の項目について、「説明の確実性」「説明の一貫性」等の項目が、自然探究コースに比べ、社会探究コースがやや重要度指標が低く、維持項目に挙がっており、社会探究コースにおいても探究のプロセスをより系統立てて指導していくことが課題である。	ウェルビーイングのループリックの各観点項目について、5段階のループリック評価でどこまで到達しているか、1学年では5観点全てで重要度指標・満足度指標ともに高く、重点維持項目に挙げられているが、2学年ではほぼすべての項目で重要度指標が下がっている傾向にある。
ポートフォリオ分析から「学習時間」と「他教科に役立つ」項目を理科と数学で取り出してみると、数学に比べ理科の満足度指標が低い傾向にある。理科的な視点で他教科を学ぶ教科横断型授業の実践を進めるために中学校段階で学校設定科目の「JWB ⁽⁸⁾ 」や「J-Tech ⁽⁹⁾ 」、高校1年次に理科4領域を学際的な問いで構成する学校設定科目「未来科学 ⁽⁷⁾ 」を設置している。探究の「問い」を通して、理論や原理を理解したうえで、学んだことを応用し、自ら探究の「問い」を創る流れを他教科での学びでも活用できるように、日常生活に着目した教材開発に加え、他教科の題材を理科的な見方・考え方で学ぶ教材開発ができるように開発していきたい。	自然探究コースにおいて特にSS課題研究 ⁽¹⁵⁾ や学際課題研究 ⁽¹⁷⁾ を選択している生徒は、理科・数学の教員からより系統立てて専門的な研究手法を学んでいるため、これらの説明の確実性や一貫性の重要度が高いことが要因として挙げられる。社会探究コースのGS課題研究 ⁽¹⁶⁾ においても、GS本 ⁽¹⁹⁾ などを用いてしっかりと指導していきたい。	1学年から2学年にかけてロジックリサーチ ⁽¹²⁾ 、プレ課題研究 ⁽¹³⁾ 、課題研究と段階的により深くテーマを追求することで次第に自身が目指すウェルビーイングとは何なのかを理解し、そこに到達するまでのハードルが次第に上がっているのが要因ではないかと考えられる。生徒が目指すウェルビーイングはどのようなものであるのかは、非常に難しいテーマであるため、Well-being I・II ⁽²⁶⁾ の科目だけでなく、すべての教科・科目で目指し、考えていく課題である。今後の探究的な活動や授業においても、生徒・教職員それぞれでウェルビーイングに対する意識を高め、ぼんやりした目標からより具体的な目標になるよう努力をしていかなければならない。
「理科は日常生活で役立つ」「数学は日常生活で役立つ」の項目に対して、満足度指標は高いものの、重要度指標は低いため、維持項目に挙げられ、日常生活の疑問を探究することでさらに学びを深めさせることが課題である。	すべての学年における探究活動において、「グローバル(G)」が改善要素であり、学校外で発表する場面が少ないことが課題である。	
ロジックリサーチ ⁽¹²⁾ 、プレ課題研究 ⁽¹³⁾ 、課題研究の時間や理科・数学等の授業において探究活動を熱心に進めているが、それ以外の教科や学校生活、学校以外の生活においても探究活動の重要性を推し進めていきたい。日常生活と探究活動はお互いに影響を与え合い、生活をより深く理解する手助けをしてくれる関係にあることを理解させたい。高校で学ぶ数学や理科は、抽象的なものも多いが、日常生活をより豊かに、効率的にするための基盤となるものであり、買い物やスケジュール管理、健康管理、家事、環境問題への意識など生活のあらゆる場面で活用できる。理科・数学のどちらも学びの連続であり、探究活動を通じて得た知識を日常に活かし、日常生活の疑問を探究することでさらに学びを深めさせていきたい。	「視野の広がり」はどの学年も重点維持項目に挙げられているが、研究の概要を英語でも説明することができる「グローバルの一步」、研究の成果を様々な高校生に発表することができる「同世代発表」、研究の成果を学校外で発表することができる「国内発表」などの分野に関しては、改善項目または重要改善項目に挙げられている。KSH 学びの祭典を始めとして校外における課題研究の発表の場も多くの機会がある中、特定のグループのみの発表に留まっているのが現状である。2年次の課題研究が一番多く国内発表の機会があり、自身のプレゼンテーションのスキルなどを最も高めることができる学年であるため、引き続き指導し、そして多くの場を提供していきたい。最終目標は国外での英語による発表である。令和6年度も12名の2年生が海外で研究内容を発表することができた。国外発表までは行かなくても、2年次の1年間で最低1回は課題研究の内容を他校生や本校教員外の大人に見てもらえる場を今まで以上に多く設定するようにしていきたい。	